

救急隊員と医療スタッフ意見交換

「周産期」対応で連携



「周産期医療における救急対応」を中心に意見を交わした救急症例検討会

製鉄記念室蘭病院（前田征洋病院長）の救急症例検討会が、室蘭市知利別町の同病院で開かれた。陣痛がある妊婦などの「周産期医療における救急対応」を中心とした症例や、搬送時の処置について、西胆振の救急隊員らが、同病院の医師らと意見交換。適切な対応を図っていくための知識を共有した。（松岡秀宜）

検討会は、同病院に搬送した症例のうち、救急隊員が行った特徴的な対応などについて、西胆振管内の救急隊が情報を共有するための勉強会。室蘭、登別、西胆振、白老各消防の救急隊員や、同病院の医師ら約100人が参加。計四つの症例について報告・検討した。「救急現場における産科事案に関する考察」では、39週の妊婦が自宅で出産し、既に胎児は娩出されていた状態で、救急隊員が到着した症例。室蘭市消防本部の村上昌司救急救命士は、同本部の過去10年の出動件数約3万9千件のうち「出産・

製鉄記念病院 症例検討会

分娩は12件しかない。その中でも、既に産まれていたり、現着後に産まれたのはわずか7件」と説明した。

その上で、心肺停止症例の年間搬送件数が平均98件に対し、出産・分娩は年間で0・7、1・2件程度しかない症例であることを示した上で、「まれな症例に対しては、定期的な研修・訓練によって、予測外の事態にも臨機応変な対応が取れる」などと説明した。

西胆振行政事務組合消防本部の森山英二郎救急救命士は「未受診妊婦の母子搬送症例」を説明。妊娠の兆候が分からないまま、自宅で出産した女性と胎児の「未受診妊婦のハイリスク患者」に対する対応などを振り返った。このほか「男性が大型商業施設で倒れたが、居合わせた看護師らの協力で現場で蘇生した症例」「急性心筋梗塞で2度搬送した症例」などが発表された。参加者は、一刻を争う事態での対応や連携を改めて確認していた。